

翻刻 西村天囚著『懷德堂考之一』(その四)

竹田 健二

要旨 本稿は、西村時彦(号は天囚、碩園)著『懷德堂考之一』の翻刻(その四)である。天囚の故郷である種子島・西之表市の西村家が所蔵する西村天囚関係資料の中から発見された『懷德堂考之一』(抄本、一冊)の前半部は、明治四十三年(一九一〇)一月二十九日に行われた大阪人文会第二次例会での講演の原稿となった「草稿」に該当するものであり、また『懷德堂考之一』全体としては、同年二月七日から二月二十七日まで大阪朝日新聞に連載された、天囚の「懷德堂研究其一」(完結時に『懷德堂考』上巻と改題)の草稿に当たると考えられる。『懷德堂考之一』により、懷德堂顕彰運動の起点となった天囚の懷德堂研究の実態が明らかになることは確実であり、近代日本漢学における天囚の思想的立場の解明に資すると期待される。

【キーワード】 西村天囚、「懷德堂研究其一」、「懷德堂考」、五井持軒、五井蘭洲

本稿は、西村時彦(号は天囚、碩園)の故郷である種子島・西之表市の西村家において発見された、西村天囚著『懷德堂考之一』(「學術著書」の章)、「著撰書目解題略」の章)の翻刻であり、「翻刻 西村天囚著『懷德堂考之一』(その二)」(『島根大学教育学部紀要』第五十五号(人文・社会科学)、二〇二二年二月)、「翻刻 西村天囚著『懷德堂考之一』(その三)」(『島根大学教育学部紀要』第五十七号(人文・社会科学)、二〇二四年二月)の続編である。本稿により、『懷德堂考之一』前半部の翻刻が完結する。

〔附記〕本研究は、JSPS科研費JP21H00465「日本近代人文学の再構築と漢学の伝統―西村天囚関係新資料の調査研究を中心として―」の助成を受けたものである。

【翻刻】

《二十一》

【35表】

學術著書／

蘭洲致仕後。隱居講學。無功業可称述。於是竹山撰墓碑銘也。盛称其學術「補一」。其文云「注一」。

經術承乎家。以程朱為依歸。而祛末流支離「注二」之弊。用發揚先懿。至其卓識獨見。則往々得前賢未發之旨。鷄肋質疑諸篇具存。可考而知也。史子百家。靡不闡。

汪洋闊肆。此語出于韓退之勸學解「補二」反之於約。旁治國史群籍。著說史訪議。泊万葉集詰。古今通。勢語通。源語通「補三」。源語提要。以砭千載深痼。訂註家沿習之訛。析微闡幽之功。実偉矣。豈非字洞貫万古者哉。嘗慨一時鉅儒不為少。而不局乎固滯。輒歸乎忽略。神仏譎誕之說「注三」。乘以張皇。其厭之者。變為功利「注四」【35裏】詞章「注五」。反藉口乎復古「補四」。高自標榜。好新奇之士。靡然趨附。文行岐而良材日壞。乃揭以博約之旨。矯偏拯頽「補五」。以正人心。合文於行。著非伊。非物。「非費」。承聖諸篇。芟榛蕪以示周行。後進知所鄉。若大寐新醒。豈非道足以息邪說者哉。復古之言盈天下。文士爭拾王季餘唾。影響勸說。以為欺世之捷徑。俗益媮。乃振以雄渾之辭。痛懲頑習。儼佻之徒。厭然沮喪。四方改轍。歸之。豈非文能回既倒之瀾者哉。然平居欲然。未嘗挾師儒之重。齒益高。礼愈卑。撰述之書。既累筭。請梓者屢而弗聽。

蘭洲歿後。竹山謹守遺書。校而先刻非物七卷。竹山序之云。但其立稿在乎壯歲東游之日。蓋成于享保元文之際。而竹山完【36表】校於明和三年丙戌。上梓於天明四年甲辰。此為正編。竹山又作非微八卷。脱稿於明和四年丁亥。此為統篇。正統同時刊行于世。世之非物學者。有蟹養齋非徂徠學。其自序成於宝曆四年。而其發行于名古屋。在明和二年。先于非物非微之公行實二十年矣。然蘭洲非物之立稿。前於非徂徠學。亦實十餘年矣。著之於書。以攻擊物氏者。蓋蘭洲為嚆矢「注六」。非伊不知成于何日。予未見其書。其駁擊仁齋之說者。往々散見遺稿。可以知大要。質疑瑣語二冊。並刻于明和三四年間。蘭洲茗話近刻二字。見于瑣語卷尾。不知刻成否。此書國字隨筆。承聖篇二冊成于宝曆七年。以國字破仏法。蓋做于芳烈公異端弁正弁正譯文「補六」。人不句說。取用國字云。

二書并藏在大阪函【36裏】書館【補7】。勢語通四冊。為其女分數為内外四卷。源語通。有惡人盜稿。改名曰源語梯。以布于世。竹山作源語梯弁。以弁其安。著述書目録于後。

先哲叢談云。蘭洲文世不多傳。余嘗見烈婦溺死記。叙事曲悉。使人悲痛。因録全文。其為大方所珍重也如此。吾輩亦深悲蘭洲文章或散逸不傳者久矣。不圖鷄肋篇手稿本藏于濱氏。蘭洲遺稿有太田君手寫本。鷄肋篇多壯時作。文凡壹【37表】百首併銘贊詩凡古今體二十七首。都八卷。自一卷至三卷詩文。自第四至第六卷洌菴漫録一二三。第七卷則詩文。第八卷誤書第七卷。洌菴漫録第四也。自洌菴漫録抄出者。即瑣語質疑篇也。

其文十厄論則論神道者。兵論三篇。狐妖論。駁太宰純四十六士論。郷校私議。豊公復明主書。【補8】等蓋皆東遊中之作。而得意之文也。

就中古學論。懷德論。性論二篇。百王一世論。天論。知行論等。多涉學術者。詩古今體凡十三首。合兩者則凡壹百三十餘首。詩【37裏】凡四十首。其出于世者不過什之一。而今儼存于天地間。真學界之至幸也。

鷄肋篇有文章回瀾序云【補9】。涉獵之次。遇諸家論涉明文者。采取以為編。亦唯欲扼諸說以犁文士浮靡之巢穴。蓋一種文章之非物也。未知其書存否。

太田君手寫本遺稿卷尾。録蘭洲著述書目。有刪正日本紀左伝著疑十二。恐非全本洌菴日纂一喻叢一爾雅翼四文章廻瀾一諸書。不知亦有天幸殘存于汲冢孔壁之間否。

蘭洲屢自言。不佞訥于言。荒木書中春樓書中【補10】而壯歲著撰。風後不已。何其敏于筆如此也。其文雖非無微瑕。而亦實達意自在。豈非大家乎。

【38表】蘭洲善歌。有春曙百首。見于先哲叢談【注七】。【補11】。河井立牧和之出于桂山集云。

注

一：□（竹）山碑文曰【補12】。德尊一代。曰学洞貫万古。曰道足以息邪說。曰文能回既倒之瀾。曰持己之遜。接物之孚。修業之勤。居約之安。以此五者為綱。

二：陸子語【補13】

三：山崎

四：仁齋

五：物
六：鷄肋篇与井狩雪溪書云【補14】。不佞在家塾時。得讓園隨筆讀之。乃意徂徠可謂能文已矣。後讀学則。意是異撰之学已矣。無幾如江都。則徂徠已物故。享保十三年歿不獲臻其居親睹其風采也。是為憾已。偶有人。持弁名弁道。及論語徵來示。讀之

曰。与聖人之道相背馳。且疎脱失考。亦不尠。便抄録而疵瑕焉。（中略）解綬而帰。乃輯而為篇。

又云【補15】。醉墨生嘗言。東郭有雪溪先生井子者。隱君子也。屹然卓立。□（不）可徂徠。嘗為文駁論語徵（中略）。生復為致其駁。及其喻不佞語。語甚豈弟謙遜。實非不佞所敢當。乃伏讀之。議論明備。鑿□（と）有拠。且有一二与鄙見相符者。私自喜慰（中略）莫逆神交。是尚何必面晤【補16】。所著之書。時と改竄。尚未得就緒。是以無有汚視聽報盛意。且也徂徠亦一代偉人。海内仰之。吾儕無似。焉有能軒輊於茲哉【補17】。但招覆醬之誚已。

蘭洲之於非物。雪溪之於駁徵。養齋之於非徂徠学。竹山之於非微。皆發難於大阪。可謂奇矣。

七：是新題百首之誤

【書き下し文】

學術著書
蘭洲致仕の後、隱居して学を講ず。功業の称述すべきもの無し。是に於て竹山墓碑銘を撰するや、盛んに其の學術を称す。其の文に云ふ、

経術 家に承くるに、程朱を以て依歸と為して、末流支離の弊を祛り、用て先懿を發揚す。其の卓識獨見に至るは、則ち往々にして前賢未發の旨を得て、『鷄肋』・『質疑』の諸篇に具に存す。考へて知るべきなり。史・子・百家、闕はざる靡く、汪洋闊肆にして、此の語 韓退之の勸学解より出づ。之を約に反す。旁ら国史群籍を治め、『説史訪議』、洌菴『万葉集註』・『古今通』・『勢語通』・『源語通』・『源語提要』を著し、以て千載の深痼を砭し、註家沿習の譌を訂す。析微闡幽の功、実に偉なり。豈に学の万古を洞貫する者に非ずや。嘗て慨くに一時鉅儒少なしと為さざるも、固滞に局せざれば、輒ち忽略に帰す。神仏譎誕の説、乘じて以て張皇す。其の之を厭ふ者、變じて功利詞章を為し、反つて復古を藉口し、高く自ら標榜す。新奇を好むの士、靡然として趨附し、文行岐れて良材日に壞る。乃ち掲ぐるに博約の旨を以てし、偏を矯めて頹を拯ひ、以て人心を正して、文を行ひに合す。『非伊』・『非物』・『非費』・『承聖』の諸篇を著す。榛蕪を芟りて以て周行を示す。後進の郷く所を知ること、大寐の新醒するが若し。豈に道は以て邪説を息むに足る者に非ずや。復古の言 天下に盈ち、文士争ひて王季の餘唾を拾ふ。影響勸説し、以て世を欺くの捷徑と為す。俗益ます媮なり。乃ち振ふに雄渾の辞を以てし、痛く頑習を懲らせば、儂佻の徒、厭然として沮喪し、四方轍を改めて、之に帰す。豈に文は能く既倒の瀾を回す者に非ずや。然して平居欲然として、未だ嘗て師儒の重きを挾らず、齒益いよ高くして、礼愈いよ卑し。撰述の書、既に筭に累なり。梓を請ふ者屢しばあるも聴さず。

蘭洲の歿後、竹山謹んで遺書を守り、校して先づ『非物』七卷を刻す。竹山之に序し

て云ふ、「但し其の稿を立つること壯歳東游の日に在り」と。蓋し享保・元文の際に成らん。而して竹山・校を明和三年丙戌に完うし、梓に天明四年甲辰に上す。此れ正編為り。竹山又た『非微』八巻を作る。稿を明和四年丁亥に脱す。此れ続編為り。正統同時に世に刊行す。世の物字を非る者に、蟹養齋の『非徂徠学』有り。其の自序宝暦四年に成りて、其の名古屋に発行すること、明和二年に在り。『非物』・『非微』の公行に先んずること実に二十年なり。然れども蘭洲の『非物』の稿を立つること、『非徂徠学』に前んずることも亦た実に十餘年なり。之を書に著して、以て物氏を攻撃する者は、蓋し蘭洲もて嚆矢と為す。『非伊』は何日に成るかを知らず。予未だ其の書を見ざるも、其の仁齋の説を駁撃する者、往々にして遺稿に散見す。以て大要を知るべし。『質疑』・『瑣語』二冊は、並び明和三・四年の間に刻せらる。『蘭洲茗話』は「近刻」の二字、『瑣語』の巻尾に見る。刻の成否を知らず。此の書は国字の随筆なり。『承聖篇』二冊 宝暦七年に成る。国字を以て仏法を破る。蓋し芳烈公の異端弁正弁正譯文に倣ふ。人句読せざれば、取るに国字を用ふと云ふ。二書並び蔵せられて大阪図書館に在り。『勢語通』四冊は、其の女の為に数を分ちて内・外四巻と為す。『源語通』は、悪人の稿を盗むこと有りて、名を改めて『源語梯』と曰ひて、以て世に布す。竹山『源語梯弁』を作り、以て其の妄を弁す。著述書目 後に録す。

『先哲叢談』に云ふ、「蘭洲の文世に多くは伝はらず。余嘗て『烈婦溺死の記』を見るに、叙事曲悉、人をして悲痛せしむ」と。因りて全文を録す。其の大方の珍重する所為るや此くの如し。吾輩も亦た深く蘭洲の文章の或いは散逸して伝はらざる者久しきを悲しむ。凶らずも『鶏肋篇』手稿本 濱氏に蔵せられ、『蘭洲遺稿』に太田君の手写本有り。『鶏肋篇』に壮時の作多し。文凡そ壹百首餘を併す詩凡そ古今体二十七首、都て八巻、一卷より三巻に至るは詩文なり。第四より第六巻に至るは『冽菴漫録』一・二・三なり。第七巻は則ち詩文なり。第八巻は誤りて「第七巻」と書すも、『冽菴漫録』第四なり。『冽菴漫録』より抄出する者、即ち『瑣語』・『質疑篇』なり。

其の文の「十厄論」は則ち神道を論ずる者なり。「兵論」三篇・「狐妖論」・「駁太宰純四十六士論」・「郷校私議」・「豊公復明主書」等は、蓋し皆東遊中の作にして、得意の文なり。

『遺稿』二巻に、文の題目有る者、凡五十一首なり。其の内『鶏肋篇』と重複する者十六篇なり。其の餘無題の随筆甚だ多し。

就中「古学論」・「懷徳論」・「性論」二篇・「百王一世論」・「天論」・「知行論」等、學術に渉る者多し。

詩は古今体凡そ十三首なり。両者を合すれば、則ち文は凡そ壹百三十餘首、詩は凡そ四十首なり。其の世に出づる者は什の一に過ぎずして、今天地の間に儼存するは、真に学界の至幸なり。

『鶏肋篇』に「文章回瀾の序」有りて云ふ、「涉獵の次は、諸家の明文を論渉する者に

遇へば、采取して以て編と為す。」亦た唯だ諸説に拠り以て文士の浮靡の巢穴を犁せんと欲す」と。蓋し一種の文章の『非物』なり。未だ其の書の存否を知らず。

太田君の手写本『遺稿』の巻尾に、「蘭洲著述書目」を録す。『刪正日本紀』・「左伝著疑」十二。恐らくは全本に非ず『冽菴日纂』一・「喩叢」一・「爾雅翼」四・「文章廻瀾」一の諸書有り。亦た天幸有りて汲冢・孔壁の間に残存するや否やを知らず。

蘭洲屢しば自ら「不佞 言に訥」と言ふも、荒木書中・春樓書中而れども壯歳より著撰し、風後も已まず。何ぞ其れ筆に敏なること此くの如きや。其の文 微瑕無きに非ずと雖も、而して亦た実に達意自在なり。豈に大家に非ずや。

蘭洲歌を善くして、『春曙百首』有り。『先哲叢談』に見ゆ。河井立牧之に和して「桂山集」を出すと云ふ。

注

一：竹山の碑文曰はく、「徳は一代に尊ばる」と。曰はく、「学は万古を洞貫す」と。曰はく、「道は以て邪説を息むに足る」と。曰はく、「文は能く既倒の瀾を回す」と。曰はく、「己の遜を持し、物の孚に接し、業の勤を修め、約の安に居る」と。此の五者を以て綱と為す。

二：陸子の語なり。

三：山崎なり。

四：仁齋なり。

五：物なり。

六：『鶏肋篇』「井狩雪溪に与ふ」の書に云ふ、「不佞 家塾に在る時に、『護園隨筆』を得て之を読む。乃ち意へらく、徂徠能文と謂ふべきのみと。後に『字則』を讀みて、意へらく、是れ異撰の学なるのみと。幾も無く江都に如くに、則ち徂徠已に物故し、享保十三年歿す。其の居に臻りて親しく其の風采を睹るを獲ざるなり。是れ憾みと為すのみ。偶たま人有り、『弁名』・『弁道』、及び『論語徴』を持ちて来示す。之を讀みて曰はく、「聖人の道と相ひ背馳す。且つ疎脱にして考を失ふことも亦た尠なからず。便ち抄録して疵瑕す。(中略) 綬を解きて帰る。乃ち輟めて篇を為す。

又た云ふ、「醉墨生嘗て言ふ、『東郭に雪溪先生井子なる者あり。隠君子なり。屹然として卓立し、徂徠を不可とす。嘗て文を為り『論語徴』を駁す。(中略)。生 復た其の駁を致すを為さんとするに、其の不佞を喩すの語に及ぶに、語 甚だ豈弟にして謙遜、実に不佞の敢へて当たる所に非ず。乃ち伏して之を讀むに、議論明備、鑿々として拠有り。且つ一・二鄙見と相ひ符する者有りて、私自に喜慰す(中略) 莫逆の神交、是れ尚くして何ぞ必ずしも面晤せん。著す所の書、時と改竄し、尚ほ未だ緒に就くを得ず。是を以て視聽を汚して盛意に報ゆること有る無し。且つ徂徠も亦た一代の偉人にして、海内之を仰ぐ。吾儕 似る無し。焉ぞ軒輊を茲に能くす

ること有らんや。但だ覆醬の誦りを招くのみ」と。

蘭洲の『非物』に於ける、雪溪の『駁徴』に於ける、養斎の『非徂徠学』に於ける、竹山の『非徴』に於ける、皆難を大阪に発するは、奇と謂ふべし。

七：是れ『新題百首』の誤なり。

補注

- 1：「竹山撰墓碑銘」は、「蘭洲五井先生之墓」(『浪華名家碑文集』所収)を指す。
- 2：「此語」は「閑肆」を、「韓退之勸学解」は、韓愈(退之は字)の「進学解」をそれぞれ指し、「勸学解」は天因の記憶違いかと思われる。『韓昌黎集』卷十二「進学解」に「先生之於文、可謂閎其中而肆其外矣。」(先生の文に於けるや、其の中に閑くして其の外に肆にすと謂ふべし)の語がある。
- 3：「蘭洲五井先生之墓」は、「源語通」を「源語詰」に作る。「源語詰」が正しい。
- 4：「蘭洲五井先生之墓」は、「藉口」を「籍口」に作る。
- 5：「拯」字について、「蘭洲五井先生之墓」は「極」字に作る。天因が文意から改めたものと思われる。
- 6：「芳烈公異端弁正弁正訳文」について、「芳烈公」は備前・岡山藩主の池田光政。『異端弁正』は、明の詹陵の撰。後述する《二十四》「著撰書目解題略」において天因は、蘭洲が『承聖篇』の巻首で『異端弁正』の書について言及している箇所を引用している。「弁正訳文」については不詳。
- 7：「二書」とは、『質疑』・『瑣語』の合刻本と『承聖篇』とを指すと見られる。両書は、『大阪府立図書館和漢図書目録』(大阪府立図書館、明治四十二年「一九〇九」)に記載されている。但し、『懷徳堂考之一』後半には、『大阪府立図書館和漢図書目録』から抄出したと見られる蘭洲・竹山・履軒等の著書名等の一覧が記され、『図書館所蔵』との見出しが附されているのだが、その中に『承聖篇』については記述されていないものの、『質疑』・『瑣語』の合刻本についての記述がない。
- 8：このあたりには朱筆の句点から、「郷校私議」の下と、後から挿入された「豊公復明主書」の下とにあるが、文意からすると次の「等」字と「蓋」字との間にあるのが妥当である。
- 9：「文章廻瀾序」は、『鶏肋篇』卷三(第二冊)所収「文章廻瀾序」(第二十五葉表)を指す。『鶏肋篇』は、天因の引用した「涉獵之次」と「遇諸家論涉明文者。采取以為編。」との間に「輒」字があり、また「采取以為編。」と「亦唯欲捭諸説以犁文士浮靡之巢穴。」との間に「雖然王李明末大家、実非固吾輩可敢置喙」(然りと雖も王「竹田注」：王世貞・李「竹田注」：李攀龍)は明末の大家なり。実に固より吾輩の敢へて喙を置くべきに非ず)の句がある。
- 10：「荒木書中」は『鶏肋篇』卷七(第四冊)所収の「与荒木某」(第九葉表)に「不

佞訥於言(不佞言に訥)とあるのを、また「春樓書中」は『蘭洲遺稿』卷坤所収の「右寄春樓道兄」(第一葉表)に「愚素疾疾訥乎弁」(愚素より疾みて弁に訥)とあるのを指す。

11：『先哲叢談』卷四「五井蘭洲」には、「河井立牧桂山集、載倣蘭洲春曙百首倣歌」(河井立牧の『桂山集』に、蘭洲の春曙百首倣歌に倣ふを載す)とある。

12：以下注一の部分は、野紙の右上に貼付された紙片に記されている。

13：この注は「支離」の語に附されたもので、『陸象山文集』中に「支離」の語が頻出することを指していると思われる。

14：以下注六の部分は、すべて野紙の上端部に貼付された紙片に記されている。「与井狩雪溪書」は、『鶏肋篇』卷三所収の「与井狩雪溪」(第二十八葉表)を指し、引用中の割り注や「中略」は天因が補ったものである。なお、『鶏肋篇』は「不佞在家塾時」を「不佞弱冠在家塾時」(不佞弱冠にして家塾に在る時)に、「得護園隨筆讀之」を「偶得物徂來所著護園隨筆讀之」(偶たま物徂徠の著はす所の『護園隨筆』を得て之を読む)に、「可謂能文已矣」を「可謂能文者已」(文を能くする者と謂ふべし)に、「風采也」を「風采」に、「來示」を「來示余」(余に來示す)に作る。また、「來示余」の後に「旅館無聊、便取讀之、歎曰、徂徠豈翹異撰、恐(旅館無聊にして、便ち取りてのを読む。歎じて曰はく、徂徠豈に翹たも撰を異にせんや。恐らくは)を、「与聖人之道相背馳」の後に「也、其能文辭、亦適足以為遂非之資耳」(なり。其の文辭を能くするも、亦た適たま以て遂非の資と為すに足るのみ)を、「且」の後に「其」を、「亦不鈔」の後に「矣。其恐其不得相見也亦幸矣、於是不自揣」(其れ恐らくは其の相ひ見るを得ざるも亦た幸ひなり。是に於て自ら揣へずして)を脱している。更に、「瑕疵」を「指瑕」(瑕を指して)に作る。

15：「又云」以下の部分も、「与井狩雪溪」からの引用である。なお、『鶏肋篇』は「不可徂徠」を「不可徂來」に作り、また「実非不佞所敢当」を「実非不佞所敢当焉」(実に不佞の敢へて当たる所に非ず)に作る。

16：『懷徳堂考之一』に「中略」莫逆神交。是尚何必面晤。」と記されている箇所について、『鶏肋篇』には該当箇所が「男兒自信於莫逆、神交是尚、何必面晤。」(男兒自ら莫逆を信ずれば、神交是れ尚し、何ぞ必ずしも面晤せん)とあり、天因が「莫逆」の語から引用しているのは不自然に思われる。『鶏肋篇』に附されている朱筆の句点も、天因が附したものと考えられることから、天因が『懷徳堂考之一』の紙片に『鶏肋篇』の該当箇所を書写する際に、引用を誤った可能性があると考えられる。

17：『鶏肋篇』は「軒輊」を「軒輊」に作る。天因が引用に際して文意から修正したと思われる。

《二十一》

風采人物

蘭洲無画像。其風采。則碑文唯有長不滿七尺。而豪宕英邁。昂々不群。諸先達許与為奇材之語耳。〔補1〕。七尺不知鯨乎。〔補2〕。不滿似是形容短小。／
碑文又云「注1」〔補3〕。氣宇盎然醇粹。人望知其大成。(中略)与人交豈弟。徹匡幅。言動必以忠信。雖狡偽之極。而不忍欺焉。至繩愆辨理。亦心平氣和。見者莫不愛重。自少潛心墳籍。凡百戲嬉。不能少移。府素殷盛。人々以豪拳相軋。居之前後。數十年。閉戸下帷。耳若弗聞。里閭之態。多不解也。(中略)及疾恐周郵煩人。務殺衣黜食以塞意。凡自奉之非。人所不堪。而油々自得。所〔38裏〕謂持己之遜。接物之孚。修業之勤。居約之安。人莫能尚焉者。豈不信哉。／

竹山稱揚先師。極皇張之妙。然及晚年中風。頗有氣短心悶之狀。其遺稿罵仁齋罵石菴。頗乏忠厚溫藉之意。稍失詭激。豈得不免死悖之態乎。抑内矯其情。外示和平。而骯髒不平之氣。鬱勃于病餘。不能自抑。潛筆之於書。而秘匿篋笥乎。然幸因蘭洲。暴露不憚。直言不諱。我輩後人多得益於其書。則庶幾以功補過也歟。／

注

一…〔蘭〕〔洲〕云「補4」近世西鶴等が〔作〕れる草子は其たくみ水〔澁〕にまされり(著話)
二…又云「補5」すこしも後のおもんばかりあらは大成益なるへしされど西鶴などつくれる小説に若き時の放蕩後來の千悔となることをあまた書けり世の若き者もこれをすきてよめとも只馬の耳に風の如し(西鶴歿于元禄六年)

【書き下し文】

風采人物

蘭洲に画像無し。其の風采は、則ち碑文に唯だ「長さ七尺に満たずして、豪宕英邁、昂々として群れず。諸先達許与して奇材と為す」の語有るのみ。「七尺」は鯨なるか金なるかを知らず。「不滿」は是れ短小を形容するに似る。

碑文又た云ふ、「氣宇 盎然として醇粹、人望んで其の大成せんことを知る。(中略)人と交はるに豈弟、匡幅を徹し、言動必ず忠信を以てし、狡偽の極と雖も、欺くに忍びず。愆りを繩すに至りても理を辨へ、亦た心平らかにして氣和す。見る者愛重せざる莫し。少きより心を墳籍に潜む。凡百の戲嬉、少しく移すること能はず。府素より殷盛にして、人々豪拳を以て相ひ軋す。之に居ること前後数十年なるに、戸を閉ぢ帷を下して、耳聞かざるが若し。里閭の態、多くは解せざるなり。(中略)疾むに及び周郵の人を煩すを恐れ、務めて衣を殺ぎ食を黜けて以て意を塞がんとす。凡そ自奉の非きは、人の堪へざる所なるに、油々として自得す。所謂持己の遜、接物の孚、

修業の勤、居約の安、人の能く焉を尚ぶ者莫し。豈に信ならずや」と。

竹山先師を称揚するに、皇張の妙を極む。然るに晩年中風に及び、頗る氣短・心悶の状有り。其の遺稿に仁齋を罵り石菴を罵り、頗る忠厚溫藉の意に乏し。稍詭激に失す。豈に死悖の態を免れざるを得んや。抑そも内に其の情を矯め、外に和平を示すも、骯髒不平の氣、病餘に鬱勃たりて、自ら抑ふる能はず。潜に之を書に筆して、篋笥に秘匿せんか。然れども幸ひに蘭洲の暴露して憚らず、直言して諱まざるに因りて、我輩後人益を其の書に得ること多ければ、則ち庶幾はくは功を以て過を補はんか。

注

一…蘭洲云ふ、(和文の箇所は省略)
二…又た云ふ、(和文の箇所は省略)(西鶴 元禄六年に歿す。)

補注

1…「碑文」は前出「蘭洲五井先生之墓」(『浪華名家碑文集』卷一所収)を指す。
2…「鯨」は鯨尺(約三七・九cm)、「金」は曲尺(約三〇・三cm)を指す。
3…「碑文」は補注1に同じ。
4…「蘭洲茗話」からの引用は、懷徳堂遺書の『蘭洲茗話』卷上第四葉裏。
5…「蘭洲茗話」からの引用は、懷徳堂遺書の『蘭洲茗話』卷下第三十六葉表。懷徳堂遺書は、「すこしも」を「すこしにも」に作る。

《二十三》

【39表】

教育之功

懷徳堂。陸王之窟宅也。〔補1〕。石菴出自崎門。尊崇陸王。与執斎声氣相応。而大要猶拋朱說。於是其有鶴學之名。蘭洲云「補2」。宅子學無宗旨。壳葉以為業。喜談医。俗目之曰鶴學。言首朱尾陸。手脚如王。鳴声似医。遺稿。先哲叢談録京医香川太冲之言。曰。世呼石菴為鶴學問。此謂其首朱子。尾陽明。而声似仁齋也。〔補3〕。其言雖少異。其称石菴為鶴學則同。是蓋當時世評。非自蘭洲太冲發也。〔注1〕。整菴少時為大洲藩士岸田源進養嗣。扈侯祇役江戸。与大洲士人交。大洲昔者近江聖人之所積藪。士人皆尊崇此人。蓋亦好讀其著述。整菴知世有王學。蓋在此時。弱冠歸大阪復本姓也。始志于學問。物色其師。〔39裏〕而從學于陸王家之石菴。是亦同声相応。同氣〔相〕〔求〕〔者〕。自然之數也。既而懷徳堂成。実出于執斎之居間周旋。而以石菴為學主。以初師持軒後從石菴之長崎富永諸氏。為創學同盟。於是石菴講象山集要。又時延執斎講經同志會説。則用中江藤樹之翁問答。熊沢蕃山之集義和書等。是豈非陸王之窟宅乎。／
蘭洲承家學。尊奉程朱。其學穩正。務去偏固支離之弊。故往々有雖程朱之説不從者。

而要歸于程朱。其長在攻駁。故自壯至老。為程朱禦侮。以排異為任。如非伊非物是也。豈獨不非陸王。故其遺稿。朱陸之弁。衝口而發。其人如彼。其學如此。而入陸王之窟宅。曷得久居其間哉。是以初懷德堂之建也。以整菴懇請不已。暫為講師。然未幾【40表】而去。雖出于有四方之志。而亦或以志不同不相為謀也歟【注二】【補4】。蘭洲西歸之日。石菴既歿。而整菴督學。可惜懷德堂之講殆廢。於是蘭洲為斯文。慨然蹶起。勸以日講。整菴亦欣然從之。聘致蘭洲。令居右塾。蘭洲有答整菴書【補5】。可見其見解不一。学力不均【注三】。而自壯結交。其撰別号。皆取之井卦。二井友道之厚。不為志尚小異。最可欽也。整菴歿後。遺囑以春樓為學主。世稱其反始重義。以予觀之。春樓平凡。蘭洲碩學鴻儒。為當代耆宿。學主之任。非蘭洲而誰。整菴所以不托之蘭洲者。其遺狀云【補6】。五井兄年老。且喜隱居。而不樂斯任。其或然。而蘭洲之學。不與懷德堂學風相合。亦得無非其一因乎。春樓名正誼。字子和。称才二郎。自幼資質虛弱。……【40裏】其不能承家學。繼先業。因為之別立生活之計【注四】。正德……丸藥。実出于讚州門人之勸。白石菴在世春樓猶幼時。其藥盛行。是蘭洲之所以極口罵倒也。丸藥以熊胆為主味。熊胆不廉。乃代用牛胆。是以蘭洲竹山。並非議之。遺稿云【補7】。有一儒先。其家製藥劑為丸。命門人鬻於他邦。取其利。頗致饒給。世称以富備。且其劑中以熊胆為主味。以熊胆真者價甚貴也。代以牛胆。不幾自欺欺人乎。可謂蚩賊者。不自鬻其鄉者。蓋惡商名。滅其迹也。是陽取儒名。陰求商實。我所不滿也。竹山御同志中相談云【補8】。一牛胆之事。一圓愚案に落不申。其説長く候。五井先生も平生被仰候事有之。御同志中には御存知にて候。亡父も兼ては内と申罷在。(中略)反魂丹の本方は。熊胆を用候事と承及候。(中略)反魂丹の古名にては。麴薬の類に相成申候。讚州の偽丸は。包紙を似せ候迄にて。薬は定て本方の通にて。当家を欺候迄にて。世を欺かず。当家は少しは世を欺き候に落申候。儒者の正道に於ては如何布物に御座候。万年先生の思召付に非難を付候様にて。千万恐入候へ共(中略)餘り御功者過ぎ鞠術に落ち候は。乍憚流石之故先生も。子を思ふ道にと申氣味も有之候哉と。折には潜に存し出し。嘆息に及び候。(中略)故先生草業の蔭にて。もしや御後悔は被成間敷哉と被存候。／

初響之於讚州。不響於大阪。以取陽儒陰商之効。石菴歿後。春樓年十九。專以壳藥為業。遂開店舖揭招牌。竹山相談云【補9】。寛延中隣之新助跡一所に被成。店を張り。色々合業之看板も出候て。弥壳藥隱遁之御工夫にて。儒業は其助のみの義に御座候。／

【41表】然不全廢學。頗識文字者。整菴督勵之力也。又云【補10】。故先生御卒去之後。御同人學問筋。亡父も相應の御世話申候内。御自分の御器用御發明にて。儒業も出来候様に御成被成候。至此春樓督學。猶不廢壳藥業。其藥盛售。而讚州偽丸出焉。争訟紛々。頗失体面。而猶称學主。儼然帶刀。遺稿云【補11】。近世有家為商賈之事。以殖貨。遂其欲。身称士儒。公然佩双刀。居商賈之上者。可謂羊質虎皮。見草即喜者。陽儒陰商。見利而悅者矣。而官不禁。世不非。儒者之風掃地而尽矣。可歎哉。若愛束脩不以賑其家。何不去為商賈。商賈雖可賤。亦四民之一也。不可無也。今也陽取儒名。陰求商實。其吾則不信也。○竹山相談亦成春樓二子云【補12】。内分と申しても。商賈有之候事ハ公法を候候事故。他所ハ不知。学校に於てハ相濟不申。御先代ハ大に御氣象違ひ。製業の義を一廉之美事之様に被思召候故。

申立候ても所詮御用ひも無之、不及是非、其儘に打過候(中略)大に学校の風儀に墮候間、以来は相成不申、若帶刀被相止候て、壳藥隱遁にて候ハ、勝手次第之事にて候、其為人吝嗇。不知人情。遺稿云【補13】。有一儒生、壳藥以為生産、幸業實十倍於往年、家頗富、有旧婢常來、偷米、生知之、泣曰、小的有父母、每食大唐米、頃病、念食藥、乃不忍而然、生日、汝有父母、我有妻子、必償、遂禁來、或曰、請恕之、日恕之、生偷心、竹山相談覺戒二子云【補14】。儉約第一の事にて候へとも、必吝嗇に落不申候様に可有之候、素行亦無檢束。与喪家之子出游。遺稿云【補15】。維昔大阪災、禎母避火平野、而疾為終、禎居喪、有事、不得已帰大阪、徳田有隣、与禎同往、道出田辺村、万年先生為途、後万年成有隣、以与有喪者俱、又誠余曰、有事独行耳、何必從有隣、予慙服而退、是昔日懷德堂之風也、頃□□(高)明將与崎守之【注五】【補16】。俱如京賞紅葉、有病障事已、夫守之喪父母、猶未滿期、「守之商人多事」【41裏】不能終喪制、則固矣、高明郷校學主、与喪者俱遊山玩水、他門有志者觀之、則必為校風衰廢、是可慨歎之甚、其説経混□□□【補17】。蘭洲与書春樓戒之曰【補18】。高明又曰、予先人每云、陸亦可喜、設陸而非焉、則先人之非、予故欲必一之、愚乃意、是奚足厲先君子、先君子固喜陸、然未嘗一之、愚所面晤也、高明亦宜然也、且也先君子所喜於陸、豈非以其尊德性耶、高明苟以之二項(德性問學)交施並修、鞭辟近裏著、乃不期一自一也、○竹山云【補19】。亡父并五井先生も。先學主に於て。諸事冰炭にて、拙夫には限り不申候、無學無行。而校風自廢。竹山相談云【補20】。大人學術行跡等之教導、身を以率る之類は、御務難被成御様子に有之、惣体之御風儀は、やはり學主より以前之儘にて、此近年は御老病故、別て何事も御構不被成、依之學主御相統以來、今年迄二十五ヶ年之間、学校之政は大に廢れ申候。／

春樓為學主。在宝曆七年【注六】【補21】。宝曆十一年八月易伝講畢。実令竹山時と代講云。九月以後。二七朝講。竹山代講。則教授実権在竹山【補22】。然非學主不能一變校風。荏苒送日。春樓以天明二年壬寅十月九日卒。寿七十一【補23】。(初配大田氏【補24】。生一男。名有恒。殤。繼配河合氏。生一男二女。男天。後配增田氏。生一男。名如畿。有妾名梶。生庶子如式【補25】。)初以年高子幼【補26】。權取門人「林」光同為嗣。配以長女。「既」而光同亡。女改醮川部正利。次女配田中実栄。葬在河内服部川神光寺先塋之次。(春樓以正徳二年壬辰十一月十五日生【補27】)／

【42表】二子幸藏永藏不肖。竹山相談云【補28】。是迄學主御病身にて、庭訓も行届不申、年来大に手おくれに相成。竹山嫁妾教子。处理後事。二子背義。後遂移居。更赴讚州云。／

竹山繼春樓為學主。竹山歿後。迎老弟履軒為學主。竹山履軒出。而懷德書院之學大振。而教育竹山履軒者。実蘭洲也。／

蘭洲以元文四年。自津輕歸大阪。時年四十三。學問長進。鬱成一家。竹山時年十一。履軒年八歲。整菴從古人易子而教之義。託二子於蘭洲【注七】。蘭洲尽心教育二子。蘭洲雖非學主。而实振懷德堂之文權者。二十餘年矣。二子在懷德堂受業。莫非蘭洲之教導。蘭洲歿于宝曆十二年。竹山時年三十四。履軒三十一。並屹然成一家矣。竹山答藤江貞藏論字學書云【補29】。□(愚)少歲【42裏】學蘭洲先生之書。一日先生命臨枝山文賦帖。積時月覺得力。其後學米南宮、又學褚遂良枯樹帖【補30】。／○蘭洲祝枝山真

蹟跋云「補31」、余弱冠喜祝枝山書、購求法帖、坐起每隨、則謂明人之書、可与宋人頡頏者、唯祝為然、唯齋書道字學哉。其學出自蘭洲。觀于有非物而有非微。可以知而已。／

懷德堂陸王之窟宅。而蘭洲以程朱為婦。然不偏于程朱。竹山亦從程朱。而不偏于程朱。其學實出自蘭洲。而其文章經論。亦自蘭洲得來。而懷德堂學風一變。懷德堂古無詩賦文章。至蘭洲竹山。斯文大振。懷德堂昔時主陸王。至蘭洲竹山。盛張朱說。而天下靡然從之。伝云「補32」、自子慶盛張朱說而來、若肥後數子厚、讚岐柴彦助、備中西山子雅、伊予尾藤志尹、肥前古賀淳風、繼踵而出、不期同唱朱子。寬政之異學禁亦出。而竹山贊成之。因得樂翁公之知。實出于蘭洲之教。不可為竹山媚于尚政。而懷德堂世々不「43表」絶者。蘭洲教育之功也。石菴坐談家也。不長于講說文章。斃菴學主踐履。以德行勝。其學問非可与蘭洲比較。雖有石菴二子。不能生竹山履軒。微蘭洲其奈我大阪文學何。其奈我懷德堂何。懷德堂之所以為懷德堂者。我蘭洲先生之功也。／

蘭洲之學。得竹山而一變懷德堂之學風。脇愚山出于閩西。繼孤山之後。而竹山獨內不棄家學。有外朱內王之見。東之有佐藤一齋。西之有丸川千秋。並伝王學。而千秋門人山田方谷出于一齋。而後石菴之學。亦依竹山振于關東山陽。不亦奇乎。／

注

一：不問語有胎範先生略伝云。其學宗洛閩。此書刻于寬政異學禁之後。故云。

二：學弊「補33」／

蘭洲云。為陸王學者。廢問學。棄事物。其弊也禪莊。為仁齋學者。蔑義氣。疎心性。其弊也管商功利。為徂徠學者。局於修辭。遺敬以直外之訓。其弊也放蕩浮躁。為闇齋學者。頗過嚴毅。乏雍容和氣。其弊也刻薄寡恩。惟茲四學。争弁強聒。道學乃四分五裂。使學者眩於所從。若孔孟視之。則必為之長大息而已。不知無偏無党。中正之道。蕩々平々。唯以聖賢遺訓切己。以為心術德行之基。如此而後。乃免四學之弊哉。夫水至而渠成。花謝而実結。物皆然。學為甚。陸王之學。是水未至求渠。花未謝求実。可謂大早計矣。是欲速之私心也。為仁齋徂徠之學者。涵養無素。是始不知澹水。無渠可成。不知種樹。無実可結。可謂不學亡術。朱子之學。先掘地而後引流。培根而待実。固非頓悟直入之教。陸子之不悅宜矣。又非遺心性志功利之教。仁齋徂徠之不悅亦宜矣。／

又云「補34」。近世仁齋徂徠之徒不足論。唯似而非者。如藤樹熊沢之屬。大害於道。(中略)學道懣心性之分。他復奚言。(那波魯堂學問源流及柴栗山与大江尹論學書似皆本於此文「補35」)／

三：「答井」斃菴書「補36」。曰。王子大有力。大有德。蘭洲曰。「有力則」然。有德則吾不知也。不佞不滿其人。亦唯以「高才雄」辯。且有戰功。為世所尚耳。比之薛文清篤実。「大有逕庭」。(此文論大學之誠意)／

四：春樓正徳二年生

五：克之子

六：春樓点四書竹山答頼子秋書云「補37」四書五經ノ点ミナ改定ス四書ハ已二世ニ布タリ尤四書ハ尊兄ニモ熟知ナルヘシ長者ニ譲リテ春樓ソノ主タリシユヘ少ク思意ト合ハサル所モアレドモ大意ハ異ナラズ(為レ□所レ□ヲ為二□所一レ□ト改メタルナド特色ナリ)

七：斃菴行狀云「補38」、君自少与蘭洲五井先生相善、及先生就津輕侯辟、素居十餘年、以書論學講道、其婦老于大阪也、命善等曰、五井君子畏友也、汝等師之

【書き下し文】

教育の功

懷德堂は、陸王の窟宅なり。石菴の出づるは崎門よりして、陸王を尊崇すること、執齋と声氣相ひ応ずるも、大要は猶ほ朱説に拠るがごとし。是に於て鶴学の名有り。蘭洲云ふ、「宅子の學に宗旨無し。葉を売りにて業と為し、医を談ずるを喜ぶ。俗之を目して鶴學と曰ふ。首は朱、尾は陸、手脚は王の如くにして、鳴く声は医に似るを言ふ」と。遺稿『先哲叢談』に京医・香川太冲の言を録して曰はく、「世に石菴を呼して鶴學問と為す。此れ其の首は朱子、尾は陽明にして、声は仁齋に似るを謂ふなり」と。其の言、少しく異なると雖も、其の石菴を称して鶴學と為すは則ち同じ。是れ蓋し當時の世評にして、蘭洲・太冲より発するに非ざるなり。斃菴少き時に大洲藩士・岸田源進の養嗣と為り、侯に扈ひて江戸に祇役するに、大洲士人と交はる。大洲は昔者近江聖人の積徳する所にして、士人皆此の人を尊崇す。蓋し亦た其の著述を讀むを好む。斃菴の世に王學有るを知るは、蓋し此の時に在らん。弱冠にして大阪に歸りて本姓に復するや、始めて學問に志し、其の師を物色して、陸王家の石菴に從學す。是れも亦た同声相應じ、同氣相求むる者にして、自然の數なり。既にして懷德堂成るは、實に執齋の間に居りて周旋するに出で、石菴を以て學主と為す。初め持軒を師として後に石菴に從ふの長崎・富永の諸氏を以て、創學の同盟を為す。是に於て石菴『象山集要』を講じ、又た時に執齋を延きて經を講ず。同志会讀するに、則ち中江藤樹の『翁問答』・熊沢蕃山の『集義和書』等を用ふ。是れ豈に陸王の窟宅に非ずや。蘭洲家學を承けて、程朱を尊奉す。其の學穩正にして、務めて偏固支離の弊を去る。故に往々にして程朱の説と雖も從はざる者有るも、要は程朱に歸す。其の長ずること攻駁に在り。故に壯より老に至るまで、程朱の為に侮りを禦ぎ、異を排するを以て任と為す。『非伊』・『非物』の如きは是れなり。豈に独り陸王を非らざらん。故に其の遺稿に、朱陸の弁、口を衝きて発せらる。其の人彼の如く、其の學此の如くして、陸王の窟宅に入りて、曷ぞ久しく其の間に居るを得んや。是を以て初め懷德堂の建つや、斃菴の懇請已まざるを以て、暫く講師と為るも、然して幾も未くして去る。四方の志有るに出づと雖も、亦た或ひは「志同じからざれば相ひ為に謀らず」を以するか。／

蘭洲西帰の日、石菴既に歿して、斃菴学を督るも、惜しむべし、懷徳堂の講殆ど廢る。是に於て蘭洲 斯文の為に、慨然として蹶起し、勸むるに日講を以てす。斃菴も亦た欣然として之に従ひ、蘭洲を聘致して、右塾に居らしむ。蘭洲に「斃菴に答ふ」の書有り。其の見解一ならず、学力均しからざるも、壮より交はりを結ぶを見るべし。其の別号を撰するに、皆之を井卦に取る。二井の友道の厚きこと、志の為に小異変を尚ばざること、最も欽ふべきなり。斃菴の歿後、春楼を以て学主と為すを遺囑す。世其の始に反り義を重んずるを称す。予を以て之を觀れば、春楼は平凡にして、蘭洲は碩学鴻儒、当代の耆宿為り。学主の任、蘭洲に非ずして誰ぞ。斃菴の之を蘭洲に托さざる所以の者は、其の遺状に云ふ、「五井兄年老ひ、且つ隱居を喜びて、斯の任を承しませぬ」と。其れ或いは然らんも、蘭洲の学、懷徳堂の学風と相ひ合せざるも、亦た其の一因に非ざること無きを得んか。

春楼名は正誼、字は子和、才二郎と稱す。幼より資質虚弱にして、……其の家学を承けて先業を継ぐ能はざるを□、因りて之が為に別に生活の計を立つ。正徳……丸葉。実に讚州門人の勧めに出づ。石菴の在世にして春楼猶ほ幼き時より、其の葉 盛行す。是れ蘭洲の口を極めて罵倒する所以なり。丸葉 熊の胆を以て主味と為すに、熊の胆廉ならず。乃ち牛胆を代用す。是を以て蘭洲竹山、並び之を非議す。遺稿に云ふ、「二儒先有り。其の家 藥劑を製して丸と為し、門人に命じて他邦に鬻ぎ、其の利を取めて、頗る饒給を致す。世 稱するに富儒を以てす。且つ其の劑中 熊胆を以て主味と為すに、熊胆の真なる者の價甚だ貴きを以てするや、代ふるに牛胆を以てす。自ら欺き人を欺くに幾からざらんや。蚩氓と謂ふべき者なり。自ら其の郷に鬻がざるは、蓋し悪商の名ありて、其の迹を滅さんとすればなり。是れ陽に儒名を取り、陰に商実を求む。我の不满とする所なり」と。竹山の御同志中相談に云ふ、「(和文の引用箇所は省略)」と。初め之を讚州に鬻ぎ、大阪に鬻がず。以て陽儒陰商の効を収む。石菴の歿後、春楼年十九にして、専ら売業を以て業と為す。遂に店舗を開きて招牌を掲ぐ。竹山相談に云ふ、「(和文の引用箇所は省略)」と。

然れども全くは学を廢せず。頗る文字を識るは、斃菴の督励の力なり。又た云ふ、「(和文の引用箇所は省略)」と。此に至りて春楼督学たるも、猶ほ売業の業を廢せず、其の葉盛んに售れて、讚州に偽丸出づ。争訟紛々たりて、頗る体面を失ふ。而れども猶ほ学主と稱して、儼然として帶刀す。『遺稿』に云ふ、「近世に家 商賈の事を為し、以て貨を殖し、其の欲を遂げ、身は士儒と稱し、公然と双刀を佩びて、商賈の上に居る者有り。羊質虎皮にして、草を見れば即ち喜ぶ者と謂ふべし。陽に儒、陰に商にして、利を見て悦ぶ者なり。而れども官禁せず、世非らず、儒者の風地を掃ひて尽く。歎くべきかな。若し束脩の以て其の家を賑はさざるを憂ふれば、何ぞ去りて商賈と為らざる。商賈賤むべきと雖も、亦た四民の一なり。無みするべからざるなり。今や陽に儒名を取り、陰に商実を求む。其れ吾は則ち信ぜざるなり」と。○竹山相談も亦た春楼の二子を戒めて云ふ、「(和文の引用箇所は省略)」と。其の人と為り吝嗇にして、人情を知らず。『遺稿』に云ふ、「一儒生有り、葉を売り以て生産を為すに、幸ひに葉賣 往年に十倍して、家頗る富む。旧婢常に來たる有りて、米を偷む。生 之を知るに、

泣きて曰はく、「小的に父母有り。毎に大唐米を食す。頃ごろ病み、梁を食らはせんと念ひ、乃ち忍びずして然す」と。生日はく、「汝に父母有り、我に妻子有り。必ず償へ」と。遂に來るを禁ず。或ひと曰はく、「請ふ、之を恕せ」と。曰はく、「之を恕せば、偷心を生ず」と。『竹山相談』に二子を戒めて云ふ、「(和文の引用箇所は省略)」と。素行も亦た檢束する無し。喪家の子と出游す。『遺稿』に云ふ、「維昔大阪に災あるに、禎の母火を平野に避くるに、疾みて為に終る。禎喪に居るに、事有りて、已むを得ず大阪に歸るに、徳田有隣、禎と同往す。道して田辺村に出づるに、万年先生 途為り。後に万年 有隣を戒むるに、喪有る者と俱にするを以てす。又た余を試めて曰はく、『事有れば独行するのみ。何ぞ必ずしも有隣を従へんや』と。予 慙服して退く。是れ昔日の懷徳堂の風なり。頃 聞くに高明 將に崎守之と俱に京に如きて紅葉を賞せんとするに、病障の事有りて已む。夫れ守之 父母を喪ひて、猶ほ未だ期を満たさず。守之 商人なり。多事にして喪制を終ふること能はざるは、則ち固なり。高明 郷校の学主なり。喪者と俱に遊山玩水するは、他門の志有る者之を觀れば、則ち必ず校風衰廢すと為す。是れ慨歎すべき甚だしきなり」と。其の経を説くに□□□を混ぜず。蘭洲 書を春楼に与へて之を戒めて曰ふ、「高明又た曰はく、『予の先人毎に云ふ、『陸も亦た喜ぶべし』と。設しも陸にして焉を非とすれば、則ち先人の非なり。予故に必ず之を一にせんと欲す』と。愚乃ち意へらく、是れ奚ぞ先君子に厲するに足らん。先君子固より陸を喜ぶ。然れども未だ嘗て之を一にせず。愚の面睹する所なり。高明も亦た宜しく然るべきなり。且つ先君子の陸に喜ぶ所 豈に『主に』其の徳性を尊ぶを以てするに非ずや。高明 苟も之の二項(徳性・問学)を以てて交施並修し、鞭辟近裏の著くれば、乃ち一にするを期せざるも自ずから一なり」と。○竹山云ふ、「(和文の引用箇所は省略)」と。無学無行にして、校風自ら廢る。竹山相談に云ふ、「(和文の引用箇所は省略)」と。

春楼 学主為ること、宝曆七年に在り。宝曆十一年八月、易伝講畢る。実は竹山をして時と代講せしむと云ふ。九月以後、二七朝講は、竹山代講す。則ち教授の実権は竹山に在り。然れども学主に非ざれば校風を一変する能はず。荏苒として日を送る。春楼 天明二年壬寅十月九日を以て卒す。寿七十一。(初配 大田氏。一男を生む。名は有恒。殤す。継配 河合氏。一男二女を生む。男夭す。後配は増田氏。一男を生む。名は如織。妾有り、名は梶。庶子 如式を生む。) 初め年高の子の幼なるを以て、權に門人・「林」光同を取りて嗣と為し、配するに長女を以てするも、「既にして」光同亡ぬ。女改めて川部正利に配す。次女 田中実栄に配す。葬 河内服部川神光寺先塋の次に在り。(春楼 正徳二年壬辰十一月十五日を以て生る)

二子幸藏永藏不肖なり。竹山相談に云ふ、「(和文の引用箇所は省略)」と。竹山 妾を嫁し子を教へて、後事を処理するも、二子 義に背き、後に遂に居を移し、更に讚州に赴くと云ふ。竹山 春楼を継ぎて学主と為る。竹山の歿後、老弟・履軒を教育する者は、実に蘭洲なり。履軒出でて、懷徳書院の学大いに振ひて、竹山・履軒を教育する者は、実に蘭洲なり。蘭洲 元文四年を以て、津軽より大阪に歸る。時に年 四十三。学問長進して、鬱として一家を成す。竹山時に年十一、履軒年八歳なり。斃菴 古人の子を易へて之を教ふるの義に従ひ、二子を蘭洲に託す。蘭洲 心を尽くして二子を教育す。蘭洲 学主に非ずと雖も、実に懷徳堂の文権を振るふ者、二十餘年なり。二子 懷徳堂に在りて業を受くるに、蘭洲の教導に非ざる莫し。蘭洲 宝曆十二年に歿す。竹山時に年三十四、

履軒三十一にして、並びて屹然として一家を成す。竹山「答藤江貞藏論字字の書」に云ふ、「愚少歳 蘭洲先生の書を学ぶ。一日先生命じて枝山の文賦帖を臨す。時月を積みて力を得るを覚ゆ。其後米南宮を学び、又た椿遠良の枯樹賦を学ぶ。○蘭洲「祝枝山真蹟跋」に云ふ、「余弱冠にして祝枝山の書を喜び、法帖を購求して、坐起するに毎に随ふ、則ち謂へらく明人の書、宋人と頡頏する者は、唯だ祝のみ然りと為す」と。唯れ尙だ書道字字のみならんや。其の学の出づるは蘭洲よりす。『非物』有りて『非微』有るを觀れば、以て知るべきのみ。

懷德堂は陸王の窟宅にして、蘭洲は程朱を以て帰と為す。然れども程朱に偏せず。竹山も亦た程朱に従ふも、程朱に偏せず。其の学実に出づること蘭洲よりして、其の文章経論も亦た蘭洲より得來すればなり。而して懷德堂の学風一変す。懷德堂に古詩賦文章無し。蘭洲竹山に至りて、斯文大いに振ふ。懷德堂昔時陸王を主とす。蘭洲竹山に至りて、朱説を盛張す。而して天下靡然として之に従ふ。伝に云ふ、「子慶の朱説を盛張するより來りて、肥後の數子厚、讃岐の柴彦助、備中の西山子雅、伊予の尾藤志尹、肥前の古賀淳風の若き、踵を繼ぎて出で、期せずして同に朱子を唱ふ。」と。寛政の異学の禁も亦た出でて、竹山之に賛成し、因りて柴翁公の知を得るは、実に蘭洲の教に出づ。竹山政に尚たるに媚ぶと為すべからず。而して懷德堂の世と絶えざるは、蘭洲の教育の功なり。石菴は坐談家なり。講説・文章に長せず。莞菴の学は踐履を主とし、德行を以て勝るも、其の学問は蘭洲と比較すべきに非ず。石菴の二子有りと雖も、竹山・履軒を生ずる能はず。蘭洲微かりせば其れ我が大阪文学を奈何せん。其れ我が懷德堂を奈何せん。懷德堂の懷德堂為る所以の者は、我が蘭洲先生の功なり。

注

一：『不問語』に胎範先生の略伝有りて云ふ、「其の学 洛閩を宗とす」と。此の書 寛政異学の禁の後に刻せらるが故に云ふ。

二：学弊

蘭洲云ふ、「陸王の学を為す者は、問学を廢して、事物を棄つ。其の弊や禪莊なり。仁斎の学を為す者は、義氣を蔑して、心性を疎んず。其の弊や管商功利なり。徂徠の学を為す者は、修辭に局し、敬 以て外を直くするの訓を遺る。其の弊や放蕩浮躁なり。闇斎の学を為す者は、頗る嚴毅に過ぎて、雍容和氣に乏し。其の弊や刻薄寡恩なり。惟ふに茲の四学は、争弁強聒して、道学乃ち四分五裂し、学者をして従ふ所に眩せしむ。若し孔孟之を視れば、則ち必ず之が為に長大息するのみ。偏無く党無く、中正の道、蕩と平と、唯だ聖賢の遺訓己に切なるを以て、以て心術德行の

基と為すに如かず。此くの如くにして後に、乃ち四学の弊を免れんかな。夫れ水至りて渠成り、花謝して実結ぶ。物皆然り。学も甚だしと為す。陸王の学は、是れ水未だ至らずして渠を求め、花未だ謝せずして実を求む。大早計と謂ふべし。是れ速ならんと欲するの私心なり。仁斎・徂徠の学を為す者は、涵養するに素無し。是れ始めより水を瀦むるを知らず、渠の成るべき無し。樹を種うるを知らず。実の結むべき無し。不学亡術と謂ふべし。朱子の学は、先づ地を掘りて後に流れを引き、根を培ひて実を待つ。固より頓悟直入の教へに非ず。陸子の悦ばざるは宜なり。又た心性を遺れ功利に志すの教へに非ず。仁斎・徂徠の悦ばざるも亦た宜なり」と。又た云ふ、「近世の仁斎・徂徠の徒は論ずるに足らず。唯だ似て非なる者なり。藤樹・熊沢の属の如きは、大いに道を害す。(中略) 道に学びて心性の分に憚なり。他に復た奚をか言はん」と。(那波魯堂『学問源流』及び柴栗山の「大江尹に与ふる学を論ずるの書」、皆此の文に本づくに似る。

三：「井莞菴に答ふ」の書に曰ふ、「王子大いに力有り、大いに徳有り。」と。蘭洲曰はく、「力有るは則ち然り。徳有るは則ち吾知らざるなり。」「不佞其の人に満たず。亦た唯だ高才雄弁にして、且つ戦功有るを以て、世の尚ぶ所と為るのみ。之を薛文清の篤実なるに比すれば、実に大いに逕庭有り。」と。(此の文、『大学』の意を誠にするを論ず。)

四：春楼 正徳二年に生まる。

五：克の子なり。

六：春楼点四書あり。竹山の「答頼子秋」の書に云ふ、(和文の箇所は省略)

七：莞菴行状に云ふ、「君少きより蘭洲五井先生と相ひ善し。先生津軽侯の辟に就くに及び、索居すること十餘年、書を以て論学講道す。其の大阪に帰老するや、善等に命じて曰はく、『五井君子の畏友なり。汝等之を師とせよ』と。」

補注

1：このあたりの野紙の上部に、朱筆で「……宅」と記された附箋が貼付されている。
2：「蘭洲云」以下の引用は、後に「遺稿」からの引用と示されているが、「蘭洲遺稿」巻乾所収の「宅氏学無宗旨。売業以為業、喜談医。」の一節については、天囚の所蔵していた大阪府立中之島図書館の朝日新聞文庫本では、その箇所が綴じ目隠れており確認できない。中之島図書館の別本の『蘭洲遺稿』は、「嗚声似医」を「嗚声似医者」に作る。

3：香川太冲の語は、『先哲叢談』巻五・三宅石庵の末尾の部分の指す。

4：「志不同不相為謀」は、『論語』衛靈公篇の「子曰、『道不同、不相為謀。』」(子曰はく、「道同じからざれば、相ひ為に謀らず」と)、或いはそれを踏まえた慣用的表現の「道不同不相為謀、志不同不相為友」(道同じからざれば相ひ為に謀らず、志同じか

らざれば相ひ友為らず」を踏まえたかと思われる。

5：『答斃菴書』は、『鶏肋篇』卷三（第二冊）所収の「答井斃菴」を指すと思われる。天因が「可見其見解不一。」（其の見解一ならざるを見るべし。）と述べている点については、『答井斃菴』に「来書終篇誠意之論、誠天下之所同也。不佞則不然。」（来書の終篇の誠意の論は、誠に天下の同じくする所なり。不佞は則ち然りとせず。）とあることによると思われる。

6：『遺状』は、『懷徳堂内事記』所収の二通の斃菴遺状のうちの、蘭洲・春楼らに宛てた宝暦四年のものを指す。その中に「五井兄乍御苦勞御引受被下度願存候得共、御年來も拙夫と多くは隔り不申、且又表向ヶ様の勤筋被相厭、御退塾の素念熟知仕候事故」とある。

7：『遺稿』は、『蘭洲遺稿』卷乾所収の文「有一儒先。其家製藥劑為丸。」の一節。

8：ここでの「御同志中相談覚」からの引用は、「一、牛胆の事」の条の一部。但し、「（中略）」とは明示されていないが、「本方の通りにて」の後の「当家の秘薬は不存、実に熊胆を用可申候へば、利潤は薄くとも、方は却て正しく可有之候。左候へば讚州は」が省略され、また「世を欺かず」の前の「さして」、更に「如何布物に御座候」の後の「个様に申候へば其源の」も省略されている。加えて、「当家は少し世を」を「当家は少しは世を」に作り、「贗薬の類に相成候」を「贗薬の類に相成申候」に作る。この部分に限らず、天因の引用には原文に忠実ではない箇所がいくつか見受けられる。

9：『竹山相談覚』は、『御同志中相談覚』の「一、先学主御事、年来承り及候趣は」の条の一部を指す。但し、『御同志中相談覚』の「寛延年中」を「寛延中」、「店を張」を「店を張り」に作る点は、補注8の引用と同様、原文を忠実には引用していない。10：この割注に引用されているのも、『御同志中相談覚』の「一、先学主御事、年来承り及候趣は」の条の一部。但し、『御同志中相談覚』は「被成候」を「被成」に作る。

11：『遺稿』は、『蘭洲遺稿』卷坤所収の文「戦国俗、義氣尤烈。」の一部を指す。12：『竹山相談覚』は、『御同志中相談覚』の「一、兩人へ先日申候通り」の条の一部。但し、天因は原文を忠実には引用していないところがあり、原文は「内分と申しても」を「内分と申ても」に作り、また「学校に於ては相済不申」と「御先代は大に御氣象違ひ」との間に「候増而学主とて諸人の鑑と可致候御身柄には甚不都合にて候是等之義」の語句がある。更に、原文は「以来は相成不申」を「以来は相成不申候」に作る。

13：『遺稿』は、『蘭洲遺稿』卷坤所収の「有一儒生。私売薬以為生産。」の一部を指すが、『蘭洲遺稿』は「売薬」を「私売薬」（私に薬を売り）に、「偷米、生知之、泣曰、」を「生其家偷米櫃中米生組」に、「祖」に「知之乃曰汝何故然乃泣曰」（其の

家に生まれればなり。米櫃中の米を偷む。生 祖めて之を知りて、乃ち曰はく、「汝 何の故に然る」と。乃ち泣きて曰はく）に、「生曰」を「請有之已後無復然生怒曰」（請ふ、之を宥せ。已後復た然ること無し」と。生怒りて曰はく）に、「遂禁来」を「焉婢泣不允遂禁来」（婢泣くも允さず。遂に来るを禁ず）に、「生偷心」を「長彼偷心。所以過之微也。」（彼の偷心を長ず。所以に之を微に過むるなり）に作る。

14：『竹山相談覚』は、『御同志中相談覚』の「一、以来勝手向之義帳面拵へ置」の条の一部。

15：『遺稿』は、『蘭洲遺稿』卷坤所収の「維昔大阪禍」の文を指すが、『蘭洲遺稿』は「後万年先生」を「後万年」に、「有喪」を「有裏」に、「郷校学主」を「郷校学主先生」に作る。また「則固矣」と「高明」（敬称。ここでは春楼を指す）との間に「人亦不責之以其制亦固僕異」（人も亦た之を責めず。其の制を以てするも亦た固なり。僕の異とするは）の語句がある。

16：『崎守之』は、五同志の一人長崎克之の子。注五参照。

17：『懷徳堂考』上巻において天因は、「石菴は朱陸併せ崇ぶも、朱は朱陸は陸として混一せざりけるに、春楼は朱陸一致の説を唱へ」たと述べている。

18：蘭洲が春楼に与えた書は、『蘭洲遺稿』卷坤所収の「寄春楼道兄」の書を指す。『蘭洲遺稿』は「然也且也」を「然且也」に、また「其尊徳性」を「其主尊徳性」に作る。「徳性問学」は、『蘭洲遺稿』にはなく、天因が補った語である。

19：竹山の発言の引用は、「三宅幸蔵変宅に付御同志中へ懸合候覚」の「一、同、御両家不和故に宅替と申風説も有之由」の条の一部を指す。「三宅幸蔵変宅に付御同志中へ懸合候覚」は、「并」を「并に」に作る。また天因は「竹山云」の下に句点を入れるべきところを、誤って「亡」字の下に入れてある。

20：『竹山相談覚』は、『御同志中相談覚』の「一、先学主御事」の条の一部。21：中井斃菴が没したのは宝暦八年（一七五八）六月で、『懷徳堂内事記』に斃菴の二通の遺状に続いて「宝暦八年戊寅七月、三宅先生無違背相統有之候」とある。従って、春楼が懷徳堂の第三代学主となつたのは宝暦八年であり、天因が何故「宝暦七年」としたのかは不明。

22：『懷徳堂内事記』には、宝暦九年（一七五九）五月、『易伝』の講義を行つていた蘭洲が中風を発病し、同年八月より春楼が代わつて『易伝』を「統講」したと述べられている。また「同（竹田注：宝暦十一年）八月易伝の講相済、是迄春楼先生故障の節は、臨時の助講善太毎々相務候所、九月より二七の朝講は、善太引受致助講候へとの事にて、同月十二日より近思録開講、」とある。この箇所の天因の記述は、これらの記述に基づく。

23：『浪華名家碑文集』所収の「春楼先生生柩」に「天明二年壬寅十月九日卒。寿七十一、」、『懷徳堂内事記』に「同（竹田注：天明）二年壬寅十月九日、三宅老人卒

去、廿六日迄教授休候」とあるのに基づく。

24：以下、春楼の妻子に関する天囚の記述は、「春楼先生柩」に基づく。

25：春楼の側室・梶については、『御同志中相談覚』の「一、側室梶事、年来の介抱」の条などにより、また春楼の庶子については、「春楼先生柩」に「庶子名如式」（庶子名は如式）とあるに基づく。

26：「初以年高子幼」から「葬在河内服部川神光寺先塋之次」までの記述は、『浪華名家碑文集』所収の「春楼先生柩」に基づく。

27：「春楼以正徳二年壬辰十一月十五日生」は、『浪華名家碑文集』所収の「春楼先生柩」に「先生以正徳二年壬辰十一月十五日生」とあるに基づく。

28：「竹山相談覚」は、『御同志中相談覚』の「一、兄弟両所以後の務は」の条の一部。29：「答藤江貞蔵論字学書」は、『竹山先生国字牘』所収の「答貞蔵論字学」を指すと思われる。天囚が利用した『竹山先生国字牘』については不明。

30：褚遂良の「枯樹帖」は「枯樹賦」の誤り。

31：「蘭洲祝枝山真蹟跋」は、『鶏肋篇』巻七所収の「跋祝枝山真蹟」を指す。『鶏肋篇』は、「坐起毎随」を「坐起必随」（坐起するに必ず随ふ）に作る。

32：「伝」は、山本善太の「竹山中井先生伝」を指す。《一八》補注32参照。「竹山中井先生伝」は「肥前古賀淳風」を「肥前古賀淳風者」に作る。「子慶」は竹山の字。

33：「学弊」は、『蘭洲遺稿』巻乾所収（第三十葉表）の文を指すが、『蘭洲遺稿』に「学弊」との題は附されておらず、また「直外之訓」を「直内之訓」に作り（『懷徳堂考』上巻では「内を直くするの訓」とある）、「培根而待実」を「培樹而後待実」（樹を培ひて後に実を待つ）に作る。なお、『蘭洲遺稿』に「唯以聖賢遺訓切己。以為心術徳行之基。」とある箇所を、天囚は『懷徳堂考』上巻で「唯聖賢の遺訓己に切なるを以て、心術徳行之基と爲さんに如かず」と読んでおり、「以」を衍字と見なしたと思われる。

34：『蘭洲遺稿』巻乾所収の文（第七十五葉裏）を指す。

35：柴栗山「与大江尹論学書」は、柴野栗山の「答大江尹」（『栗山文集』巻三所収）を指す。

36：以下注三の部分は、野紙の下側に貼付された紙片に記されており、髻菴の書は、補注5前出の「答井髻菴書」（『鶏肋篇』巻三）を指す。「王子」は王陽明。『鶏肋篇』は「曰」字の前に「高論」とあり、冒頭の「王子大有力。大有徳。」は髻菴が蘭洲に述べた語。また「有徳則吾不知也。」と「不佞不滿其人。」との間に「彼以彷彿一夢、斥王導為奸賊、是豈有徳者之語哉。其他指擿韓子朱子之言、率屬偷「偷」薄」（彼一夢に彷彿するを以て、王導を斥けて奸賊と為す、是れ豈に徳有る者の語ならんや。其他韓子・朱子の言を指擿するは、率偷薄に属す）の句があるが、天囚は引用に際して省略している。

37：「答頼子秋書」は、「紫雲并副墨辨、答千秋」を指す。（一）内は、天囚が例を挙げて要約した文。この竹山の書は、後に懷徳堂記念会が明治四十四年（一九一）十月に出版した懷徳堂遺書中の『竹山国字牘』にも収録されているが、『懷徳堂考之一』に引用するにあたって天囚が何に基づいたのかは不明。

38：「髻菴行状」は、『懷徳堂纂録』もしくは『奠陰集』巻二所収の「先君子胎範先生行状」を指すと思われる。『懷徳堂纂録』・『奠陰集』所収の「先君子胎範先生行状」には、「以書論学講道」と「其婦老于大阪也」との間に「往復弗措」（往復して措かず）の句がある。天囚が竹山の『奠陰集』自筆稿本を見したのは、明治四十三年（一九一〇）二月二十八日に天囚が上京して中井木菟麻呂を訪問した時であり、もしも天囚が『奠陰集』所収のものを見たとすれば、それは竹山の自筆稿本ではない。天囚は中井家所蔵の自筆稿本を見した後、『奠陰集』を含む中井家所蔵資料を謄写したいとの希望を木菟麻呂に伝え、後に謄写が大阪で行われた。従って、天囚が『懷徳堂考之一』を執筆する時点で『奠陰集』所収の「先君子胎範先生行状」を見た可能性は低いように思われる。拙稿「西村天囚『懷徳堂資料』の成立事情」と『奠陰集』（『中国研究集刊』第六十九号、二〇二三年）参照。『懷徳堂纂録』は、明治三十五年（一九〇二）に続いて明治四十一年（一九〇八）に幸田成友から資料の提供を依頼された木菟麻呂が、中井家所蔵の漢文で記された資料を編纂して作成した資料集である。この時木菟麻呂は、和文で記された資料を編纂して『懷徳堂記録拾遺』をも作成しており、『懷徳堂纂録』と並河寒泉の『拜恩志喜』と共に、三点を幸田に送った。それらは大阪市史編纂掛において写本が作成されて所蔵された。拙稿「『懷徳堂纂録』とその成立過程」（『中国研究集刊』第五十八号、二〇一四年）参照。もっとも、天囚が『懷徳堂考之一』を執筆した時点で『懷徳堂纂録』を入手していたかどうかは不明である。というのも、大阪人文会の会員である大田源之助は、木菟麻呂が幸田に提供して大阪市史編纂掛に所蔵されていた資料群に基づき、『懷徳堂記録』を編纂し、天囚に提供した。天囚が『懷徳堂考之一』の執筆の際に『懷徳堂記録』を活用したことは確実であり、また碩園記念文庫には大田所蔵の『懷徳堂記録』の写本が所蔵されているのだが、大田の編纂した『懷徳堂記録』には、『懷徳堂記録拾遺』は含まれていないもの、『懷徳堂纂録』は含まれていない。『懷徳堂考之一』を執筆するにあたり、天囚が大阪市史編纂掛に所蔵されていた『懷徳堂纂録』所収の「先君子胎範先生行状」を見た可能性は十分に考えられるが、詳細は不明である。ちなみに、大阪市史編纂掛が所蔵していた『懷徳堂纂録』は、現在は大阪市立中央図書館に所蔵されている。

《二十三》

通儒全才

蘭洲之道学。尤精性理之説。文章達意明暢。与宋学者精于性理。則拙于文章。長于文章。則昧于性理者。□然□【43裏】撰。享保以後学者。恐罕其比【注二】。詩則不多作。其存者可誦。七絶史学則家伝日本紀学。其著有説史訪議。其他蹟家義貞檄【補一】。豊相国復明主書【補二】。百王一世論等【補三】。有弁名分明大義者。国学則有万葉古今等之著。其咏亦妙【注二】。且通于源語勢語。神道有十厄論【補四】。排仏有承聖篇。可知頗通仏書。蓋持軒再閱藏經【補五】。是亦家法也。經濟則有郷校私議【補六】。最尚名節。砥礪行義。而駁太宰春台四十六士論【補七】。凜々如嚴霜烈日。其於文学。固為世業。而武道亦少壯講修不忘。中風後有句云【補八】。射圃強入少年隊。一箭射墜細的鴻。馬場放鞞馳先衆。半白乞骸歸故郷。弓術蓋其所長。文中往々説及。又有兵論三篇【補九】。可又見【44表】於詭道。亦具一隻眼矣。／

竹山撰碑銘云【注三】。【補一〇】。天相斯文。実降先生。襄夫異言【注四】。承續往聖。有委有源。通儒全才。琢詞蒼珉。休風千載者。決非門弟子之溢美私言也。／

予乃謂。蘭洲慶元以來我大阪第一等之大家也。／

注

- 一：我が儒生尊漢以為中華、自以我邦為夷狄、猶不敬其親敬他人之類、（遺稿）【補一】
- 二：…神儒一致といふ心を／ちはやふる神代もめをのことはりのたかはぬや国つをしへなるらん／神仏別致といふ心を／おしなへて世をそむく道におもむかはあをひとくさの根はたえぬへし【補一二】
- 三：碑文冒頭云【補一三】。蘭洲先生之疾也。囑曰。予少小辞家。壮而官東陬。履歷今無知者。德薄而才劣。無可称。一二有之。我不敢告也。死之日。勿碣焉。勿文焉。迨歿。知旧門人議鐫石。或曰。有治命。僉曰。先生之謙也。先生德尊一代。学洞貫今古。云々。積善自幼從游之久。受知実深。庸可以文不腆辞乎。云々。竹山皇張敷衍。銘文並妙。弟履軒書篆。以立豊碑。秋渚氏云。儒林立碑者多矣。石大文巧。以蘭洲碑為最。四：与撰同

【書き下し文】

通儒全才

蘭洲の道学は、尤も性理の説に精し。文章は達意明暢なり。宋の学者の性理に精しければ、則ち文章に拙なく、文章に長ずれば、則ち性理に味き者と、□然と□撰たり。享保以後の学者に、恐らくは其の比ひに罕なり。詩は則ち多くは作らざるも、其の存する者は誦すべし。七絶あり。史学は則ち家に日本紀の学を伝ふ。其の著に『説史訪議』

有り。其の他に「蹟家義貞檄」、「豊相国復明主書」、「百王一世論」等あり。名分を弁じて大義を明らかにする者有り。国学は則ち『万葉』・『古今』等の著有り。其の咏するも亦た妙なり。且つ「源語」・「勢語」に通ず。神道に「十厄論」有り。排仏に「承聖篇」有り。頗る仏書に通ずるを知るべし。蓋し持軒再び藏經を閲す。是れも亦た家法なり。經濟は則ち『郷校私議』有り。最も名節を尚び、行義に砥礪して、太宰春台の「四十六士論」を駁すること、凜々として嚴霜烈日の如し。其の文学に於けるや、固より世業と為すも、武道も亦た少壯より講修して怠らず。中風後に句有りて云ふ、「射圃強めて入る少年隊。一箭射墜とす細的の鴻。馬場鞞を放ちて馳けて衆に先んず。半白骸を乞ひて故郷に帰る」と。弓術は蓋し其の長ずる所ならん。文中往々にして説き及ぶ。又た「兵論」三篇有り。又た詭道に於いても亦た一隻眼を見ふるを見るべし。竹山撰の碑銘に云ふ、「天斯文を相けて、実に先生を降す。夫の異言を襄ひ、績を往聖に承く、委有り源有り、通儒全才、詞を蒼珉に琢く、休風千載なり」とは、決して門弟子の溢美私言に非ざるなり。

予乃ち謂へらく、蘭洲は慶元以来の我が大阪の第一等の大家なり。

注

- 一：我が邦の儒生は漢を尊びて以て中華と為し、自ら我が邦を以て夷狄と為す。猶ほ其の親を敬はずして他人を敬ふの類なり。（遺稿）
- 二：（和文の引用のため省略）
- 三：碑文の冒頭に云ふ、「蘭洲先生の疾あるや、囑して曰はく、『予少小にして家を辞し、壯にして東陬に官す。履歷今に知る者無し。德薄くして才劣り、称すべきこと無し。一二之れ有るも、我れ敢へて告げざるなり。死するの日、碣する勿れ。文する勿かれ』と。歿するに迨び、知旧門人石に鐫むを議す。或るひと曰はく、『治命有り』と。僉曰はく、『先生の徳は一代に尊く、学は今古を洞貫す』云々。「積善幼より從游することの久しく、知を受くること實に深し。庸ぞ文を以て辞を腆くせざるべけんや」云々と。竹山皇張敷衍して、銘・文並びに妙なり。弟履軒篆を書して、以て豊碑を立つ。秋渚氏云はく、「儒林碑を立つる者多し。石大にして文巧なること、蘭洲の碑を以て最と為す」と。
- 四：「撰」と同じ。

補注

- 1：「蹟家義貞檄」は、『鶏肋篇』卷一所収の「説源蹟家源義貞等論天下檄」を指す。
- 2：「豊相国復明主書」は、『蘭洲遺稿』坤卷及び『鶏肋篇』卷三・七所収（重出）の「擬豊相国復明神宗帝書」を指す（それらの中には字句の異同が認められる）。なお、『蘭洲遺稿』においては題名が附されていない。

3…「百王一世論」は、『蘭洲遺稿』乾卷所収(第五十五葉表、第五十七葉裏)。但し、『蘭洲遺稿』においては題名が附されていないが、末尾の箇所に「題以百王一姓論以蔵筐中」(題するに百王一姓論を以てし、以て筐中に蔵す)とある。なお、「百王一姓」は百王一系、万世一系の意であり、「一世」と「一姓」とは同義。陶徳民「国粹主義と中華崇拜を超えて―五井蘭洲『百王一姓論』の再評価―」(『東アジア文化交渉研究』第一号、二〇一一年)参照。『蘭洲遺稿』乾卷所収の「頃説新刊書、号日本魂」の条には、「余嘗て百王一世論詳之」(余嘗て百王一世論を著して之を詳らかにす)とある。

4…「十厄論」は『鶏肋篇』卷一所収。

5…「持軒再閲蔵経」(持軒再び蔵経を閲す)の語は、『鶏肋篇』卷一所収の「持軒養生行状」にある語。《七》「人物德行」の節参照。

6…「郷校私議」は『鶏肋篇』卷二所収。

7…「駁太宰春台四十六士論」は『鶏肋篇』卷一所収の「駁太宰純四十六士論」を指す。

8…「句」は『蘭洲遺稿』乾卷所収の「中風行擬白楽天」(中風行白楽天に擬す)中の句を指す。『蘭洲遺稿』は「帰故郷」を「還故郷」に作る。

9…「兵論三篇」は『鶏肋篇』卷一所収。

10…「碑銘」は『浪華名家碑文集』第一冊所収の竹山撰「蘭洲五井先生の墓」を指す。

11…「遺稿」は、『蘭洲遺稿』乾卷所収の「近世我邦儒生」の条の一部を指す。但し、『蘭洲遺稿』は「我邦儒生」の後に「多党其所狙」(多く其の狙れる所に党し)の句が、また「自我邦為夷狄」の後に「恬然安之」(恬然として之に安んず)の句があり、天因は引用に際して省略したと見られる。なお、天因旧蔵の朝日新聞文庫所収の『蘭洲遺稿』では、「近世」から「自我邦為」までの部分(第五十九葉表第一行)が綴じ目のために読めない。

12…二首は共に『蘭洲遺稿』坤卷所収の和歌。「めを」は「めをとこ」、男女の意。「あをひとくさ」は人民の意。

13…以下注四の部分は、罫紙の上に貼付された紙片に記されている。「碑文」は「蘭洲五井先生の墓」を指す。『浪華名家碑文集』は「洞貫今古」を「洞貫万今」(万古を洞貫す)に作る。

《二十四》

著撰書目解題略

○非物篇六卷

壮歳起稿西帰後猶改刪明和三年完校天明四年上梓

○質疑篇一卷

刻于明和三四年中

【44裏】

○瑣語二冊

同上

○蘭洲茗話二冊国字

外孫長嶋宜泰校【補1】

○承聖篇二冊国字

宝暦七年脱稿以上二種現蔵在大阪図書館【補2】

序云宇宙之間有道焉名為中正外此皆邪説暴行已浮屠乘之衆庶趨之云々【補3】

綱常不可一日而廢云々【補4】宝暦七年丁丑十月望五井純禎撰

卷首云近世岡山の太守は国を治むるに仏法を用ひず異端弁正の書公行として印行し人間に行はる【補5】異端弁正の書は漢文にうとき人はよ【45表】みとくと難かるへければこ、に和文をもてしるし伝るものならし【補6】

△万葉集話【補7】

古今通の序万葉の話を集め云々されは集話にあらすして集話なり

○勢語通四冊千草屋本【注一】【補8】

序に発端より第百十二段昔男やもめにてゐてとい「へ」るまでは中将の心ありてかける日記なるへしそれを伊勢が清書する時少つ、かき改め又詞をくハへ又中将の事にもあらぬことをも又誰ともしらぬ女の哥をもせたり仁和の帝といふよりおくまでハ伊勢か聞伝へたるま、に追加をせるならんこれを世に知らせ【45裏】んとて中将の没後光孝天皇の年号をもて書出せり終りに中将の臨終の歌をのせたるは自記にあらざる證を見るへし伊勢より後の事のあるは後人この書を注せし詞のたまへ本文にまじりたるなり(略)人の妻にかよふなど耳をけかすことなり今其実事をのみぬき出して古人の注を用ひ又みつからの見をくハへ内の巻と名け我家のいせものかたりとしひとつ子のむすめによましむ中将の時を憂ひ世を憤るこ、ろを明にし色このみといふ名をす、す、かんことをねかふのみあとに残れるは実事にあらねと言つかひふるくおもしろく又あるへき文にもあらずされど注者のとき得ざる所も有と見ゆるゆへこれらも一巻【46表】とし外の巻と名つけおろへその注を施し侍る

内卷二冊外卷二冊内外とも其の巻尾に

宝暦元年冬しはす筆を冽菴の南窓にとる

とあり外卷下の巻尾に

宝暦五年冬十月養氣盈枝書写終る

と記せり【補9】

○古今通五冊千草屋本

序に云く【補10】としこる万葉の話を集め伊勢物語を内外にわかつてる時この

集を併せ考ふる事の侍りて家に伝へもてる定家卿の遺書顕昭の注榮雅の抄契沖の餘材抄などを見侍りし万葉集は【46裏】からうたに比ふれハ毛詩の如し今の世の歌のさまざま古今集は唐詩の如し万葉につめて文華質実を備へてめてたき事なり(中略)顕昭は略せり榮雅は心ゆかず契注は岐路おほくて煩はしよりて僭妄を忘れてその説のまされりとおほしきを抄出し又みづからの簡見を稍くハへ云々
巻尾に

古今通八卷蘭洲五井氏所撰宝曆丙子【注二】之春備前僑居中繕写卒業

吉田盈枝

とあり吉田盈枝は彼の懷徳堂創学同盟の一人なる備前屋吉左衛門【補11】にあらざるか

【47表】

源語話三冊千草屋本

天文地理時居処宮室鬼神虚詞(以上一卷)人倫支體草木禽獸服食器財(以上二卷)人事(以上三卷)に分ちて之を注したり巻尾に

右源語話三卷蘭洲先生所著丙子【注三】之秋吉田盈枝贍

とあり古今通と同時同人の写本なり

源語梯三冊は天明四年【注四】の刻本なり中本竹山の源語梯辨を巻首に置き「源語梯は即ち源語話なるよし記せし【補12】又云【補13】『かく他手に落ちたるは先生の日に直に請求めて伝写したる一人ありその本をこの撰者かねて転借して写し取おきしとなり』云々

【47裏】附言には『浪華黄備園主人識』とありて余方技を業とすれば此の事に与らざるを可とすれと云々と云へり【補14】彼の蘭洲在世の日に写取りしは即ち吉田盈枝にや此の人備中にて写せしものなるか黄備園主人といへる医師は此の吉田盈枝より又借して写しけるにや其書は天文地理等は話に同じけれど更にいろはに分類し且辨に云へる如く或は節略し或は敷演し或は刪り或は補ひたれと大体は話を本としたるもの也竹山書林の□(信?)付くのみならず裨益もあれはとて辨を附して世に行はしめし也けり

【48表】

○新題百首和歌一冊千草屋本の露香手写【補15】

一題一首にして一首毎に古歌の典故を旁注せり巻尾に

右新題百首倭歌者五井蘭洲子所詠也今以懷徳堂裏之本令転写卒

元治元年三月五日 春愛 春愛

附云同時川井立牧以此題詠之由伝聞未收其稿他日可索也

右先哲叢談に見えたり【補16】

○非伊

○非費

右碑文に見ゆれとも未見其書

【48裏】

○読史訪議

或は読史訪ともあり

○文章回瀾一冊

鶏肋篇に序文あり先儒の明文を論せしものを抄録編纂せしものにて又徂徠

□□□□の為なるへし

○冽菴日纂一冊

○爾雅翼四冊

○左伝蕃疑十二冊

大田君之抄記に見ゆ

○冽菴漫録四卷

質疑瑣語從此篇抄刻

【49表】

○源語提要

○諭叢一冊

注

一：遺稿云【補17】勢語通一篇去年以来失其所在向也足下言正菴氏嘗贍写之從何

処得之乎云々(与白埜書)

二：六年

三：宝曆六年

四：去宝曆六年二十九年

【書き下し文】

著撰書目解題略

○非物篇六卷

壮歳に稿を起して、西帰の後に猶ほ改刪し、明和三年に完校、天明四年に梓に上す。

○質疑篇一卷

明和三・四年中に刻す。

○瑣語二冊

同上

○蘭洲茗話二冊 国字

外孫・長嶋宜泰校す。

○承聖篇二冊異字

宝暦七年脱稿す。以上二種、現に蔵せられて大阪図書館に在り。

序に云ふ、「宇宙の間に、道有り。名づけて中正と為す。此れに外れるは皆邪説暴行なるのみ。浮屠之に乗じて、衆庶之に趨る」云々。「綱常にして一日にして廢すべからず」云々。「宝暦七年丁丑十月望、五井純禎撰す。」と。

卷首に云ふ、「(和文の箇所は省略)」と。

△万葉集話(和文の箇所は省略)

○勢語通四冊千草屋本

(和文の箇所は省略)

○古今通五冊千草屋本

(和文の箇所は省略)

古今通八卷、蘭洲五井氏の撰する所なり。宝暦丙子の春、備前僑居中繕写して業を卒ふ。

吉田盈枝

(和文の箇所は省略)

○源語話三冊千草屋本

(和文の箇所は省略)

右源語話三卷、蘭洲先生著す所なり。丙子の秋吉田盈枝贍す

(和文の箇所は省略)

○新題百首和歌一冊千草屋本の露香手写

(和文の箇所は省略)

右新題百首倭歌は、五井蘭洲子の詠する所なり。今懷徳堂裏の本を以て転写せしめて卒る。

文治元年三月五日 春愛 春愛

附りに云ふ、時を同じくして川井立牧此の題を以て詠するの由、伝聞するも、未だ其の稿を収めず。他日索むべきなり。

(和文の箇所は省略)

○非伊

○非費

(和文の箇所は省略) 未だ其の書を見ず。

○読史訪議

(和文の箇所は省略)

○文章回瀾一冊

(和文の箇所は省略)

○冽菴日纂一冊

○爾雅翼四冊

○左伝蕃疑十二冊

(和文の箇所は省略)

○冽菴漫録四卷

『質疑』・『瑣語』此篇より抄刻す。

○源語提要

○諭叢一冊

注

一：遺稿云ふ、「勢語通一篇、去年以来、其の所在向を失ふなり。足下正菴氏嘗て之を贍写すと言う。」「何処より之を得るか。」云々と。(白埜に与ふる書)

二：六年

三：宝暦六年

四：宝暦六年を去ること二十九年

補注

1：長嶋宜泰は、蘭洲の娘・せつと長崎宗助(号は廉斎)との子。《二十》「子孫」の節参照。『懷徳堂考』上巻で天因は長嶋宜泰について「竹山門人なるべし。長嶋氏の子孫は詳ならず」と述べる。大阪府立中之島図書館には、天因が見たであろう『茗話』の写本が現存する。同書は明治三十八年八月三十一日に受け入れられたもので、「初代豊田文三郎氏遺書」の印記がある。上巻の内題は「茗話卷之上」、「蘭洲五井先生著 外孫長嶋宜泰校」とあり、下巻の内題は「蘭洲茗話卷之下」、「無名氏」とある。湯城吉信「五井蘭洲著『茗話』写本における未翻刻部分の存在について」(『大阪府立大学高専研究紀要』第五〇号、二〇一六年)は、「上下とも冒頭部に「蘭洲五井先生著 外孫長嶋宜泰校」とあり」と述べるが、「外孫長嶋宜泰校」の語は上巻にのみあり、下巻にはない。この写本は、明治四十四年(一九一一年)に懷徳堂記念会が記念出版した懷徳堂遺書の『蘭洲茗話』の底本となった。

2：『承聖篇』二冊が大阪府立図書館(現・大阪府立中之島図書館)に所蔵されていたことについては、同館が明治四十一年(一九〇八)三月末の時点で所蔵する和漢書の目録『大阪府立図書館和漢図書目録』(大阪府立図書館、明治四十二年(一九〇九)に「五井純禎(蘭洲)著 写本」二冊として記載があり、同書は大阪府立中之島図書館に現存する。また『懷徳堂考之二』後半部の、天因が『大阪府立図書館和漢図書目録』から懷徳堂関係者の著書の情報を抄出して「図書館所蔵」と見出しを附した部分の中にも『承聖篇』について記載がある。なお、『蘭洲茗話』も『大

阪府立図書館和漢図書目録』には書名が『茗話』、「五井純禎(蘭洲)著 写本」二冊として記載されているが、『懷徳堂考之一』後半部の「図書館所蔵」の中には『茗話』について記載されていない。

3…大阪府立中之島図書館所蔵の『承聖篇』は、「暴行已」の後に「淪而不明」(淪みて明らかならず)の句がある。懷徳堂文庫所蔵の写本も同じ。

4…大阪府立中之島図書館所蔵の『承聖篇』は、「綱常」を「倫理綱常」に作る。懷徳堂文庫所蔵の写本も同じ。

5…「巻首」とあるが、大阪府立中之島図書館所蔵の『承聖篇』において、「近世岡山の人間に行はる」は本文第二葉表七行目〜同九行目。「公行として」を中之島図書館所蔵本は、「行然として」に作る。天因の誤写であろう。

6…大阪府立中之島図書館所蔵の『承聖篇』において、「異端弁正の書は漢文〜ものならず」は第二葉裏九行目〜同十一行目で、「異端辨正の書は漢文〜とき人は、よみとくことかたかるへけれハ、ここに、和文をもてしるし伝るものならず」に作る。

7…『万葉集話』の書名の上のみ「○」ではなく「△」とあるが、その意味は不明。

8…「千草屋本」は、両替商・千種屋を継いだ平瀬三七雄(一八七六一一九二七。号は露秀)の蔵書を指すと見られる。富子家に生まれた三七雄は、明治十三年(一八八〇)に平瀬龜之助(一八三九一九〇八。名は春愛、号は露香など)の養嗣子となった。露香・露秀については、中野朋子「平瀬露香の能楽修行と演能の実態」(『大阪歴史博物館研究紀要』第十一号、二〇一三年)参照。『懷徳堂考』

上巻「五同志」の節において天因は、備前屋吉兵衛(吉田盈枝)の説明の中で、「其の手寫せる蘭洲著述の古今通は、今藏して千草屋(平瀬氏)に在り」と述べている。明治四十四年(一九一)に懷徳堂記念会が開催した展覧会の目録『懷徳堂展覧会目録』には、中井家以外から出品されたものを記した「諸家出陳目録」の中に、三七雄の出品した三宅石菴の「明道先生詩五行」・蘭洲の『新題百首 自著 壹冊』・『瑣語 三冊』・『吉田盈枝手写源語 三冊』・『同(竹田注：吉田盈枝手写) 古今通

五冊』が記載されている。「源語」とあるのは、「源語話」のことを指すと思われる。但し、「諸家出陳目録」に『勢語通』は含まれていない。懷徳堂記念会が「懷徳堂遺書」として記念出版した『勢語通』について、吉田鋭雄「懷徳堂所蔵懷徳堂先賢著述書目」(『懷徳』第十九号、一九四一年)は、「平瀬家本を底本とし、手稿本を以て対校して出来たものである」と述べており、その対校を行ったのは大阪人文会

会員の一柳安治郎である。「手稿本」とは、昭和十四年(一九三九)に中井木菟麻呂が財団法人懷徳堂記念会に寄贈した遺書に含まれていたもので、現在は懷徳堂文庫に収蔵されている。なお、天因の引用は、手稿本・記念出版本との間に字句の異同や衍字が認められ(「色」のみといふ名をす、す、かん)の「す、」また「略」とは記されていないが省略した部分があり、原本に忠実ではない箇所がある。ちな

みに、天因の没後結成された故西村博士記念会は、天因と親交のあった関係者から寄付金を募り、その寄附金で天因の遺書を西村家から購入し、碩園記念文庫と名付けて財団法人懷徳堂記念会に寄贈したのだが、その際に三七雄は、個人の寄付としては高額の属する金三百円の寄附を行っている。このことは、種子島の西村家が所蔵する資料の一つ「故西村博士記念会公務報告」から判明した。湯浅邦弘「竹田健二・佐伯薫「西村天因関係資料調査報告」種子島西村家訪問記」(『懷徳』第八十六号、二〇一八年)所収の拙稿「三、故西村博士記念会公務報告書」参照。

9…宝暦二年・同五年の奥書は、千草屋本のみにあるものと思われるが、不明。

10…「千草屋本」とあることから、天因が引用した『古今通』も、平瀬三七雄が所蔵していたもので、明治四十四年(一九一)に懷徳堂記念会が開催した展覧会に出品したものと考えられる。現在、大阪府立中之島図書館・朝日新聞文庫に収蔵されている『古今通』は、虫損が激しいが、おそらく「千草屋本」か、或いは「千草屋本」に基づく写本と見られ、天因旧蔵のものである可能性が高いと考えられる。天因の引用は、朝日新聞文庫所蔵のものの一部字句の異同が認められるものの(引用では「話」とあるところが「話」「比すれば」とあるところが「比ふれハ」「稍」とあるところが「稍」とあるなど)、比較的よく一致しており、また同本の巻末には天因が引用した通りの吉田盈枝の識語がある。

11…「備前屋吉左衛門」とあるのは、「備前屋吉兵衛」の誤り。

12…竹山の「源語梯辨」は、刊本である『源語梯』(文政六年刊)の冒頭に附されている。その冒頭の一文は「源語梯ハ即ち吾蘭洲五井先生ノ著ス所ノ源語話ナリ」であり、天因の引用は原文に忠実ではないところがある。なお、天因の記した鉤括弧()は、おそらく当初天因は引用をしようとして記したが、結局引用ではなく要約としたため、受ける鉤括弧()を記さなかったものと推測される。

13…この天因の引用も原文に忠実ではない。原文は「カク他手ニ落タルハイカニト推究スルニ、先生存在ノ日ニ直ニ請求メテ、伝写シタル一人アリ。ソノ本ヲ、コノ撰者カネテ転借シテ写シ取オキシトナリ」。

14…序言には「余方技ヲ業トスレバ、此事ニ与ラザルヲ可トスベケレド」とある。15…「露香」は、平瀬三七雄の父・平瀬露香。ちなみに、懷徳堂文庫に収蔵されている天因の小天閣叢書には、蘭洲の『新題百首和歌』の写本が含まれている。なお、大阪府立中之島図書館所蔵の『和歌新題百首詩』(自筆本・写本)は、書名がよく似ているが、蘭洲ではなく竹山の著である。その巻頭には「宝暦丁丑」の冬に記された竹山の序が、また巻末にも「宝暦辛巳九月 積善録」との識語がある。

16…『先哲叢談』については、『二十一』「學術著書」の補注11参照。

17…「遺稿」は、『蘭洲遺稿』乾卷所収の「与白野書」(白野に与ふるの書)の「副敬」の部分の指す。『蘭洲遺稿』は「去年以来」を「去年已来」に、「謄写」を「瞻

写」に作る。また「足下言正菴氏嘗瞻写之」と「從何処得之乎」との間に、「此篇固藏於僕篋中而不伝播於人間不知正庵氏所見之原本」（此の篇、固より僕の篋中に藏して人間に伝播せず。正庵氏見る所の原本を知らず。）の句がある。